

知的障害者のデス・エデュケーション構築の試み —もみじ寮・あざみ寮の取り組みを通して—

石 野 美也子 張 貞 京

本稿は、知的障害者のデス・エデュケーションの構築の試みにおける中間的報告であり、もみじ寮・あざみ寮の実践を通してその可能性を探るものである。

もみじ寮・あざみ寮の背景にある歴史的思想の伝承も踏まえ考察した。

キーワード：デス・エデュケーション、もみじ寮・あざみ寮、知的障害、死、不安

はじめに

本稿は知的障害者のデス・エデュケーションの構築の試みに対する一考察である。

デス・エデュケーション自体が「死の準備教育」といわれるように死について向かい合い、死を理解することによって「今をよりよく生きていく」ことを目指しており、ある意味において非常に難解なテーマでもある。一般的に、『死』はタブー視されてきたことから、まだ十分に学問的理解が深められているとは言えない。誰もが受け入れがたい、また、向かい合うことの難しいデス・エデュケーションを知的障害者の人々を対象に構築の試みを行なう経緯をまず述べることから始めたい。

本研究において協力を得る知的障害者施設のもみじ寮・あざみ寮と執筆者の関係から述べていく。

張 貞京は本施設で15年間、心理職として寮生（共に学び生活をするものとして本施設では利用者ではなく寮生という表現が使用されており本稿でも同じ意味で寮生と記す。）とかかわり、その『古い』や『死』への不安を受け止め、

その支援のあり方を模索してきた。

私は17年前に社会福祉において「人間とは何か」ということを理解するため、糸賀一雄¹研究でもみじ寮・あざみ寮を訪れたのがきっかけとなり、寮生や職員と触れ合う機会を得た。

しかし、実践においてデス・エデュケーションのような取り組みが行なわれていることを知ったのは、2年前に行なわれた糸賀一雄著「福祉の思想」の読書会の中で、実践の話に及んだとき「私はここで病気を治したい」といった末期の寮生の言葉を受け止め、制度を超えて、職員が他の寮生と共にみとりを行なったことを知ったときである。家族の迎えにも「ここで治したい」と最後までここで生きていと表明し、死を迎えたことを聞き、死を目前に理解しつつも、何故「ここで」と自己決定することができたのか、また、他の寮生はどんな気持ちだったのかということ職員にたずねたところ、今までから老いに対する不安を解消するための取り組みがあったことを知り、これはデス・エデュケーションへの取り組みに繋がるのではないかと考えるようになった。知的障害者は法律のなかでも身体障害者のように詳しく、このような人を知的障害者というかと定義されていない。個々に

違う個性を持ち、支援のあり方も一人ひとり違うだけに、定義することは難しい。しかし、そのことによって知的障害者の特性が個々別々に違い、一人ひとりに対する支援が違うのだということが理解されにくい側面がある。私は支援学校の講師をしていたとき、自分では元気にしていても、何か不安や悩みを抱えていたとき、手を握って「大丈夫か？」と聞いてくれたり幾度と無く、心の深い部分を理解し、表現する生徒に出会い「人間とは何か」という命題を考えるようになり、特に知的障害者にとって「知的」とは何を表すのかを考えてきた。

もみじ寮・あざみ寮のこの事例を聞き、『死』という誰もが理解しがたいことを学習の積み重ねによって理解し、その不安が少しでも和らんでいる現状を知り、長年考えてきた「知的障害者とは」ということと少しつながったように思えた。たとえば、知的障害者の人々の言葉や気持ちを聞き取るということが如何に重要であるか、言葉で表現できる人にとっても、言葉で表現できない人においても、職員、家族だけでなくその周囲の人々と不安や喜び、感情の表現を共感できる瞬間、そして、それらを日常の中で積み上げていくことの大切さをこの施設の実践の中から読み取ることができた。それは、知的障害者とは「物事を理解するのが難しい存在」という考え方を、支援のあり方で変えていけるという一つのモデルとすることができるのではないか。その実践をデス・エデュケーションの構築を試みるということを通して知的障害者支援のあり方の体系化につながればというのが、本研究に取り組んだ経緯であり、目的でもある。

本稿は、協力を得たもみじ・あざみ寮の今までの学習の取り組みやそこに至るまでの経過を振り返り、デス・エデュケーションの構築が試みられるのではないかと考えた特色的な実践を

分析する。

1. 先行研究と本研究の位置づけ

デス・エデュケーションにおいては、アルフォンス・デーケン、キューボラ・ロスをはじめ、医療、看護、ターミナルケアの立場からはもとより、「死の準備教育」という点からも、幼稚園、保育園の子どもたちから中高生や青年期と先行研究は多岐にわたる。しかし、デス・エデュケーションを知的障害者と結びつけたものは見あたらない。

知的障害者と不安に関する論文の中では、親亡き後の不安についてのもが多く、それらは本人自身への聞き取りというより、親や職員の立場から見たもの、また本人の思いを代弁したものの、本人の言葉を親が聞き取り、伝えた形のものであり知的障害者の人に直接聞き取ったものは見られない。

本研究で取り上げる、知的障害者のデス・エデュケーションの構築、および本人を主とした聞き取りを行なった研究は日本において筆者が調べた限りでは見られない。それだけに重要な研究であるといえる。

また、心の奥にかかわるデリケートな課題でもあり、本人をはじめ家族や、職員など、人々の心の動きを大切に研究を進めていくことが最重要課題でもあり、その過程で見えてきたものが今後の支援のあり方へとつながるものであると考える。

本稿は、以上のことを踏まえ、先に述べたように今までの施設の取り組みをまとめた、中間まとめであり今後の研究のあり方を考えるための序章である。

2. もみじ・あざみ寮の概要と歴史

現在のもみじ・あざみ寮は滋賀県、湖南市石部にあり、社会福祉法人大木会によって運営されている。同じ敷地内に建つそれぞれの施設の現状を以下に見ていく。

あざみ寮（新体系移行前は知的障害者更生施設）は女性のための施設であり、現在、入所者数は28名で平均年齢は60.7歳である。

もみじ寮（新体系移行前は知的障害者授産施設）は男性25名、女性23名の計48名が入所している。平均年齢は男性59.10歳、女性は53.10歳で男女合わせた平均は56.11歳である。

もみじ寮・あざみ寮の全体の平均年齢は58.4歳で高齢化の現状がうかがえる。

親の健否については以下の通りである。（名）
 両親が健在：あざみ寮（5）もみじ寮（6）
 父親が健在：あざみ寮（1）もみじ寮（2）
 母親が健在：あざみ寮（10）もみじ寮（15）
 両親共にいない：あざみ寮（12）もみじ寮（25）

これを見てもわかるように、本人たちの高齢化と共に、親が両親共いない人が最も多いという現状がある。また、親の高齢化のことも寮生の帰省から帰った際の話に上ることも多いということから、健在であっても体力が低下してきた保護者もいるということが見られる。

以上、現在のもみじ寮・あざみ寮の概要をその構成を中心に見てきた。（数字はもみじ寮・あざみ寮2010年度参考資料を参照）

次に、それぞれの施設の歴史を振り返る。

あざみ寮は昭和28年（1953）7月、大津市に誕生する。当初は糸賀一雄の私塾の形を取って自由契約施設として運営され、昭和33年財団法人大木会（現・社会福祉法人大木会）の経営となる。

糸賀一雄は初代近江学園園長で知的障害者の

父といわれた人である。知的障害者の法律の制定にも中心的役割を果し、近江学園で派生する課題に対し、近江学園で解決できないときには新たな施設を作り、実践していった。糸賀の中には、その実践のあり方が問題を社会化していくことであるということも一方にはあった。このような糸賀一雄の考えのもとに多くの施設が誕生した。

あざみ寮もその一つである。あざみ寮誕生に向けての糸賀一雄の思いを「あざみ寮要覧」から抜粋する。

「従来、知的障害児のうち特に女兒については、各種の事情のため、その将来の社会的自立を考えることが困難であるとされて、その対策も常に後まわしにされる傾向にあり、成人としても社会的負担のまま放置されるという有様であった。また、一方、幼児障害の子どもについては、精神医学と臨床心理学が早期発見に成功しても、その収容保護に当たる社会的施設の貧困が訴えられて来た。あざみ寮はこれらの2つの問題の解決を念願しつつささやかな一つの試みとして発足したのである。」（昭和28年7月4日）

このことは当時の知的障害の女子が児童から成人になりつつある時の進路の難しさ、生きにくさが感じられる一文である。又、現に女子ゆえに、遠い親戚に引取られ不幸な結末を迎えることもあったという時代である。

あざみ寮は成人女子の今後の自立の方向性を社会に求め、また、それを必要とする女子のための施設として今から57年前に大津で出発した。

もみじ寮は昭和44年（1969年）に現在の石部の地にあざみ寮の移転と時を同じくして同敷地内に誕生する。その背景には、もともと糸賀が

成人施設のためにと考えていた一麦寮の構想が昭和36年（1961年）国と県によって受け入れられなかったこともあり、糸賀はその構想をずっと温めていた。海外で庇護授産という形で生き生きと働いている人を見て、日本でも日本らしさを生かした庇護授産をと考えていたのである。

昭和42年に知的障害者の法律の一部改正によってそれまで援護施設だけであったのが、更生施設と授産施設に分かれ、15歳以上の知的障害児についても援護施設への入所が可能になった。あざみ寮の取り組みの中で、労働の大切さとそれに見合う賃金ということを考えてきたこともあって、法改正を機に、糸賀が長年思いがいていた、過去に果しえなかった授産施設の建設を財団法人大木会のもとにとりかかり、昭和44年に石部にもみじ寮が開設された。

しかし、糸賀一雄はこの工事が始まりだした昭和43年（1968年）9月18日に急逝した。開設を見ることは無かったが、知的障害者の人が仕事を持って生き生きと暮らすことを望んだ糸賀一雄の最後の事業であり実践であるもみじ寮は、あざみ寮とともにその思想を受け継いでいる。

もみじ寮・あざみ寮をはじめ多くの施設が近江学園から枝分かれした。そこには「目の前にいる人の問題を大切にす」それが糸賀の実践の根底にあったからこそ実現したことである。

3. もみじ寮・あざみ寮の取り組みの特色

ここでは、もみじ寮・あざみ寮の特色ある取り組みを前理事長や職員から聞き取ったことを中心に見ていく。

1. 近江学園から引き続いた相談員の存在

近江学園の時代から大津のあざみ寮、石部のもみじ寮・あざみ寮時代にわたって田中昌人、田中杉恵から今の張 貞京に引き継がれている心理相談がある。寮生はテストをととても楽しみにしている。それは、テストそのものではなく、田中先生とお話ができる、張先生に不安を相談できるという、1対1の関係を築くこと、そして受け入れられることが嬉しいのである。これは近江学園から続いている人と人との結びつきを寮生が実感する瞬間でもある。

2. 寮生劇

寮生劇はいつも3月のおひな祭りに3つの棟が保護者の前で劇を行なってきたが、あざみ寮25周年・もみじ寮の10周年を記念して昭和54年（1979年）にみんなの力で何かを表現したいと、脚本も演出も音響も今まで寮生とかかわりのあった専門家に頼み、劇団員の人たちと大きな舞台に立ち「一人ひとりが主役」という考えのもと、また、一人ひとりが支えあって一つのものを作り上げる取り組みとして寮生劇を行なった。その時の思いを当時のあざみ寮施設長の石原繁野が滋賀愛護に「83人で劇をしました」というタイトルで綴っている。「みんなが、友だちとの生活のなかで自分の生き方を見つめている、自立していると思うのです。そんな83人みんなの生活を何かで表現してみたい、そんなみんなの力で何かを作ってみたい。それがあざみ寮創立25周年、もみじ寮創立10周年記念行事、寮生劇発表会『ロビンフッドの冒険の冒険』になったわけです」²このように集団の中で一人ひとりの力が育まれる寮生劇は今も続いている。

3. お経クラブ

お経クラブは現在8名の寮生が参加している。始まりは、24年前、その頃、寮生の保護者が次々に亡くなり、不安を和らげようとしたのが始まりである。特に一人の寮生が母親を亡くし「病気のお父さんと2人になってしまった」といったことから、その寮生には妹もいるが、自分の中で父と自分だけと感じるほど大きな不安となっていることを当時の理事長三浦了は感じ、僧籍を持っている理事長はお経を唱えたり、声明を唱えたりすることで不安が和らぐのではないかと考え、お経クラブを作った。クラブに参加する人だけでなく、周囲にも影響を与え、何かの牽引力になってほしいというのが願いでもあった。それは、言葉に出さなくてもその場の雰囲気を読み取るということにつながった。「これは人が人を育てるということで、関係が育つことであり、共感の世界である」と前理事長がいわれるように、追悼会などでお経クラブの人は練習し、お経をあげることで、他の寮生とともに亡くなった仲間や家族、今まで係わってくれた人々を供養する。その雰囲気はお経クラブの人だけでなく寮生全体に供養と共に、また新たな関係を結ぶ力につながっている。

4. 学習するということ

寮では昭和62年（1987年）から三雲養護学校（現・支援学校）の先生にお願いして社会科学学習を行なっている。ニュースを発表したり選挙について考えたり、いろいろな角度から社会ということを学び、自分の考えを培っていく。

また社会科学学習だけでなく茶話会では自分の思いを話したり、お客様を呼んで話を聞いたり

している。寮生にとっては大津の時代から訪れた人の話を職員と一緒に聞き、またお話をしてくれた人も寮生と人としての結びつきを感じ、また他の人を連れて訪れるという関係が作られていた。このようなことから寮生にとってお話を聞くということは特別なことではなく、日常に組み込まれていた。そのことが、10年前に自分の体や、保護者についての高齢化に対する悩みを寮生が持ち始めたとき、前あざみ寮施設長が茶話会を使って不安軽減のプログラムを組むことを可能にしたのである。

これらの取り組みの特色の他に、お手前やや合唱クラブ、第九への参加、手話など多くの取り組みがある。上記の取り組みを見てわかるように集団の中で『個』を育て、また人とつながる取り組みに、長い年月をかけ、また引き継がれていったことがわかる。これらすべてが人格形成に重要なことである。この中でも特に、不安軽減のプログラムとお経クラブは知的障害者のデス・エデュケーションの構築の試みを可能にするものとして着目したい。

4. 不安軽減のプログラム

1) 不安を見出すまで

約10年前に、相談員に自分の親の老化に対する悩みや、自分の体に不安を訴える寮生が増えてきた。そのことに着目し、張は2000年4月から2001年8月まで対象者80人に対してリラックスした状態で個人インタビューを行い「老化に対する知的障害者の心理的変化を支援する生活課題の検討」³（2002）にまとめている。対象者80人のうち回答を得られたのは24名で、その中で張は回答によって3つのカテゴリーに分類している。

そのポイントを要約すると1つ目は年をとることに予期不安を見せたグループで24名中19名がこのグループで現在より加齢することや、老化に対して強い不安を持っている。2つ目は積極的な受容グループで70歳目前の2名であり、現在の自分を受け止めていかななくてはならないと自分自身の老化を対象化しているグループ、3つ目は安定グループで3名である。年をとることを含めてどのときの自分も好きと答えポジティブに自分をとらえるグループである。このことから見ても、寮生が自分の老いや親の老いに対して不安を抱いている人が多いことがわかり、その不安を聞いた前あざみ寮施設長の石原は茶話会などでいろいろな人にお話をしてもらうことで不安の軽減を試みた。

2) 不安軽減プログラムの実践

具体的な内容は以下の通りである。

- ① 高齢でありながら、現役の女流画家の方の話聞く。
- ② 高齢者と接して仕事をしている方からの話聞く。
- ③ 認知症の母の介護体験者の方の話聞く。
- ④ 産婦人科医による体の変化や対応の話聞く。
- ⑤ キリスト教会牧師による死後の話聞く。
- ⑥ 仏教関係者による死後の世界についての話聞く。
- ⑦ キャンプでの老人体験をする。
- ⑧ 奈良へ行き、死ぬことは怖くないという話を奈良国立博物館の西山厚さんから聞く。

以上に見るように、多岐にわたり多くの方の

お話を伺い、高齢というイメージを固定化せず、様々な生き方があることを知るとともに、いずれは加齢とともに、体力が落ちたり、誰でも加齢により体に変化が表れるという話を聞いたり、老人体験をする中で様々なことを感じ取るプログラムを組んだ。また、死ということとも向き合い、死後の世界を知り、理解することで不安を軽減する取り組みが行なわれた。

24年前に同じように死や老いに対して不安を抱いていた人に前理事長の三浦がお経クラブで難しくてもみんなでお経を読んだり、声明を唱えたりし、不安を軽減していこうとしたのと同じように、このときの取り組みも、どんなに難しいことであっても「向かい合わせたい」という思いで、多くの体験をする機会を持ち、「知的障害者だからわからないだろう」という考えは、取り組みの中には見あたらぬ。そこには「不安を持った一人の人」としての対応が行なわれている。ここにこの施設の根底にある人間観がある。

特に最後に挙げた「死は怖くない」ということは誰にとっても難解であるし、受け入れるのは難しい。この大きなテーマでのお話を寮生の人たちがどのように感じたのかを次で紹介する。

3) 「死ぬことは怖くない」ということ

石原前あざみ寮施設長は、上記のような取り組みの中で、寮生が仲間や親の死に、自分が高齢になっていくということだけでなく、死に対する不安を感じた。いつも、旅行とお話一つになっている本施設で、奈良へ行くことになり、それなら、奈良国立博物館の西山厚さんに「死ぬことは怖くない」という話をしていただけないかと手紙を書いたのが始まりである。

そのときのことを西山厚は著書「仏教発見」⁴

の中で「そんな人生の大問題について、私に話ができるのだろうか。しかし、考えた末に引き受けることにした。私はお釈迦様の死について語ることによって、『死ぬことは怖くない』というテーマに挑戦してみようと思った」⁵とある。

そして当日、ハート型の風船を飛ばしたりして、お釈迦様と死について語り、死んだ人はその人のことを思い出す人がいる限り、完全に死んだことにならないということ話をされた。

まず、お釈迦様を知っているかということから話し始めたが、「お釈迦様は知らない」という答えに困惑しながら最後まで話を進めていくと、さっき知らないと言った寮生が感想を述べた。その様子は西原厚著「仏教発見」に詳しく紹介されているので抜粋しながら寮生が如何に受け止めたのかを見ていく。

「初めにお釈迦様は知らないといったその女性の感想は思いがけないものだった。『やさしいお釈迦様は私たちの心の中にいます』その時、私の中で何かはじけた。涙があふれそうになり、こらえようとしたら、唇が震えた。私は胸がいっぱいになりただ呆然と立っていた」⁶と述べられている。

話の素晴らしさはもちろんだが、その話を受け止める素地は天津の時代から、人の話を聞くということに慣れ親しみ、適切な時に適切な経験ができているということは、非常に重要だと感じるエピソードである。

その後寄せられた感想文も素晴らしいものであるがここでは、紙面の関係で一つだけ紹介しておく。

「おしゃかさまはいつもかんがへておられました。みんながしあわせになるようにたのしくらせるようにと。わたしがしんだら、いちばんだいすきなおかあさんがきてくださいますね

しぬのはまだこわいけど、おかあさんにあえるのがたのしみです。」⁷この感想にあるように、大好きな人に会えると思うことが、不安を和らげているというのは今も寮生に共通のことであると、先日『不安』についてのグループワークを行い感じたことでもある。

積み重ねた学習は『死』という難解なことと向かい合った時でも、その理解の助けになることが上記の例でわかった。

5. 傾聴・受容・共感から自己決定

以上に見てきたように、相談員や職員が不安を聞き取り、それを聞いた前施設長や職員によって不安解消の取り組みがなされる。その中で、寮生たちは自分の不安や悲しみだけでなく、他の寮生の不安や悲しみを共にすることでお互い乗り越えて、支えあっているということが考察された。そして、そのような環境の中で、最初に述べたように『わたしはここで病気を治したい』『わたしはここで死にたい』と自己決定がなされるのではないかと。

これらの段階を振り返った時、ソーシャルワークの重要な傾聴、受容、共感、自己決定というプロセスと連動していることを見出した。

傾聴

相談員や職員によって、不安や言葉で表現しにくいことも、表情やニュアンスから聞き取る。これは常に生活を共にしていることが大きいといえる。

受容

相談員は寮生の不安を受け止め、施設長は相談員が感じたり、聞き取った不安を「誰でもあることだから」と聞き流すのではなく、そ

の不安と向き合い、少しでも解消できるように学習へとつなげる。

共感

学習を通して、寮生間だけでなく、そこでお話をしてくださった方々や職員との関係に共感の世界が生まれる。それは寮生がお互いを支え合って、特に不安や悲しみを乗り越えるときの大きな支えとなる感情の芽生えである。

自己決定

以上の3つの傾聴、受容、共感ということが大切になされる環境にあって、自分を表現し、自分の方向性を決定付けることのできる環境が生まれる。

以上、不安の発見から不安軽減の取り組みに至るまでの過程をソーシャルワークに当てはめると傾聴、受容、共感ということが個人の自己決定に至るまでの成長を支えていることがわかる。それは、前理事長が目指した人と人が係わる中での個人の育ちへと発展していることがこの取り組みから発見できた。

おわりに

最初に述べたように、何故この施設の取り組みが知的障害者のデス・エデュケーション構築の試みにつながるのではというところで、施設の取り組みを振り返った。そこには、長い年月をかけて行なわれた《人を育てる》というたゆみない努力が受け継がれている。また、思想の伝承もある。糸賀一雄が「目の前にいる人の問題を大切にす」ということから施設を展開し、その問題を社会化してきたように、もみじ寮の

不安解消のための実践には《目の前にいる人を大切にす実践》と 糸賀一雄の表現した《共感の世界》がある。そのことを社会化していくために、本研究は寮生のお話を聞くことを初めとして、多くの発展的課題を残している。

本研究において協力を頂いたもみじ寮、あざみ寮の寮生の皆様、三浦先生、石原先生をはじめ、関係の皆様から心から御礼申し上げます。

本研究は平成22、23年度の科学研究費助成金（挑戦的萌芽研究）による『知的障害者のデス・エデュケーションの可能性』（代表者 張 貞京）における構築の試みに関する研究である。

註

- 1 糸賀一雄（1914～1968）近江学園初代園長で知的障害者の福祉に尽力した。
- 2 石原 繁野 「83人で劇をしました」滋賀愛護 1980
- 3 張 貞京 「老化に対する知的障害者の心理的变化を支援する生活課題の検討」教育方法の研究第5号 2002
- 4 西山 厚 『仏教発見』講談社現代新書、2004
- 5 前掲書p.12
- 6 前掲書pp.18～19
- 7 前掲書p.19

参考文献

- 1) アルフォンス・デーケン『よく生き よく笑い よき死と出会う』新潮社 2003
- 2) アルフォンス・デーケン『死とどう向き合うか』1996、NHKライブラリー
- 3) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』2001、岩波書店
- 4) 社会福祉法人大木会『共に生きる—もみじ寮・あざみ寮の50年・35年 2004